

創造性と持続可能性
——ホワイトヘッドの文明倫理学——
Creativity and Sustainability:
Ethics of Civilization in Process Thought

名古屋柳城短期大学
St. Mary's College, Nagoya
村田 康常
MURATA Yasuto

【キーワード：ホワイトヘッド、有機体の哲学、創造性、持続可能性、文明倫理学】

本文要約

有機体と環境との創造的で調和的な関係性をプロセスとして思索する形而上学的思弁こそ、ホワイトヘッド哲学の中心的な課題である。そこには、流転する創造的世界の中で安定した秩序はいかにして維持されうるかという問いと、保守的な秩序の存続という趨勢の中でいかに創造的な新しさが導入されるかという問いがある。そこで探求されるのは、達成された調和を受けつつも既存のものを超越して新しい価値を実現する創造的なアクチュアリティと、その躍動の中で新たに実現されたものを受けて重厚な豊かさを増す全体の調和という実在のあり方である。ここには、J.B.カブが危惧した「成長のイデオロギー」のグローバルな展開と、新たに提唱されている「持続可能性のイデオロギー」との対立を超え、両者を包摂し現代文明社会を教導する文明の倫理的原理となるものが示されている。

英文アブストラクト

Whitehead's idea of "process" expresses the creative and harmonic relation between organism and its environment. His philosophy suggests a reasonable and practicable way of thinking based on its deep metaphysical cosmology to our civilized society, which is now faced on the crisis of losing of its creative harmony with its environment. In its crisis, civilized society seeks for a conciliating point of the conflict between the ideology of growth and that of sustainability. His philosophy nevertheless shows another contrast between the ideal of creativity and that of harmony. From this point of view, the civilized society must hold a twofold question: how does it sustain its stabilized order in the midst of the fluency and changing of the creative world, and how does it introduce a novel creative factor in the trend to conserve its fixed and limited traditional order?

1. 成長のイデオロギーと持続可能性のイデオロギー——「共通善」の探求

ジョン・カブは *Sustaining the Common Good* の中で、経済的な意味での「成長のイデオロギー(ideology of growth)」と対比しつつ「持続可能性のイデオロギー(ideology of sustainability)」の重要性を指摘している。その議論は、環境問題の深刻化や経済格差の拡大、宗教間の対立や暴力の浸透拡大など、現代の文明社会を破壊しかねない脅威となっている諸問題に対して、common good (共通善) という文明の徳を提唱するものである。現代文明社会の諸課題を挙げ、「共通善」を探求する際に、カブはプロセス哲学・プロセス神学に立脚し、文明社会の倫理的理念として「持続可能性のイデオロギー」が有機体論的・宇宙論的な広がりをもって確立されるよう提唱している。確かに、現代文明社会の危機と諸課題の要因を近代の「成長のイデオロギー」に求め、これに対してプロセス論的な立場から「持続可能性のイデオロギー」として具体化されうるような「共通善」を模索するカブらの議論には、鋭い危機意識と正確な社会分析、深い形而上学的洞察に支えられた豊富な含蓄と実行可能なヴィジョンがある。しかも、現代は、地球規模での文明と生命の危機に直面して、カブらの先駆的な議論が指摘した近代世界の「成長のイデオロギー」と新たな「持続可能性のイデオロギー」との二者択一的な対立に多くの論者や実践家が気づき始めた時代でもある。一方ではますます熾烈になる「成長のイデオロギー」の地球規模の拡大があり、他方ではそこに危機と限界と不公平とを見出す人々が「持続可能性」という言葉の含意する「自由で公平な、かつ持続可能な経済活動」という論調に殺到しているように見える。そして、「持続可能な成長」を模索する試みが世界中でなされ始めている。

各分野を横断する「持続可能性」の議論と実践の広まりは、一見、カブらのプロセス哲学・プロセス神学が提唱してきた方向に沿うものに見えるが、現在の持続可能性追求はそれらの形而上学的な洞察を離れて、実行可能で実益の見込める経済活動と生活様式の模索に走り、そもそも自然環境とその中で発展してきた文明社会がその全体的な多様性とそのつど実現される調和的統一性との律動の中で何を共通の善とし、どこに向かいつつあるのかを見通すような視座が欠落しつつある。文明社会の持続可能性を問うとき、われわれは、現代文明社会における自由と責任のあり方、私益を超えた全体の善の追求と個々の価値の尊重との同時実現、自他の配慮的關係、多様性ないしは多元性と寛容・敵対の問題といった倫理的な課題に直面することになる。これは、文明倫理の課題だといえる。

そのような状況下で、カブらの議論の原点となったホワイトヘッドの有機体の哲学に立ち返るとき、われわれは、そこに、近代の「成長のイデオロギー」と新たな「持続可能性

のイデオロギー」との対立を超えた、より深く広大な視座を見出す。環境と有機体との創造的で調和的な関係性や、世界の多様性を肯定しつつ個々の出来事の固有性と新しさを評価する視点など、有機体の哲学には、現代文明社会の危機に対処する基本的な思索が展開され、それらの具体的な視点を支える深い形而上学的な思弁が体系的に展開されている。

2. 創造性と調和——有機体の哲学の視座

有機体と環境の多様で創造的な調和という視座は、ホワイトヘッド哲学の「多」と「一」と「創造性」という究極的なカテゴリーに立脚した宇宙論と、「調和の調和」としての平安を追究する文明論とにおいて、体系的に示されている。注目すべきは、ホワイトヘッドが、全体と個、多と一の間ダイナミックな「創造性」と「調和」とを見出している点である。そこには、流転する創造的世界の中で、安定した秩序はいかにして維持されるのか、という問いがある。また、保守的な秩序の存続という趨勢の中で、いかに創造的な新しさが導入されるか、という問いがある。そこで思索されているのは、達成された調和を受けつつも既存のものを超越して新しい価値を実現していく世界の創造的なアクチュアリティと、そのような躍動の中で新たに実現されたものを受けて重厚な豊かさを増す全体の調和とを共に実現する生命の世界、文明社会という、しなやかで可塑的な世界のあり方である。

既存の秩序の中に新しい要素が現れ、一定の調和を達成した世界に新しい不響和音が鳴りはじめる。そうした新奇な要素が、従来の秩序に対して破壊的であり、来るべき文明社会に安全ではなく危険と騒乱を導入することがあるとホワイトヘッドは指摘する。ここに有機体の哲学の急所がある。しかし、有機体の哲学の主導的な問いは、旧来の安定した秩序のうちに新しさへの冒険の試みがいかにして導入されるか、その冒険が、硬化した秩序にいかにして新しい生命の息吹きを吹き込むか、そして、そのことによって旧来の秩序が保持してきた諸価値とその実現体系を受け継ぎつついかに新たに活気づいたより多様性のある秩序が現れるか、ということである。それはまた、宇宙の多様な出来事において実現される個別的な価値をいかに評価し、これら多様な出来事の全体が相まって実現しつつある価値をいかに評価するか、という問いでもある。全体と個におけるより高い価値の実現を目指すこの宇宙は、一方で、対立し衝突し合う諸価値による破壊や単調な反復において自らの価値を低下させ瓦解させていくといった価値低下の要因を含んだ消耗していく宇宙でもある。そのような下向きの趨勢に対して、いかに個々の経験の契機が実現する価値の内的強度を高めつつ全体の調和的価値をより広く深く実現するか、いかにして宇宙の文明化を実現するか、という問いが、有機体の哲学に立脚する文明倫理学の問いである。

3. 有機体と環境

この問題について、まず、有機体の哲学の形而上学的宇宙論における環境と有機体の関係性の存在論を検討し、次いで、その宇宙論に基づいて人間経験と文明社会の歴史的な諸相を論じた文明論における創造的な冒険と美的な調和との統合を検討することにしたい。

創造性を究極の原理とする有機体の哲学にとって、現実の世界とは新しさへの創造的前進のプロセスに他ならない。創造的前進とは、多なるもののただひたすらに生々流転する混沌ではなく、宇宙の多なる要素をそのつど一つの経験の契機へと統合し新しい調和を実現することでより豊かな多様性を産出するプロセスである。新たなものを創造的に産出する宇宙は、一定の流動性ととも一定の秩序をもっている。そして、宇宙の秩序が創造的であるのは、ただ既存の秩序の反復や状況に応じた再調整によるのではない。ホワイトヘッドによれば、アクチュアル・エンティティと名づけられた個々の経験の契機は、一連の抱握によって結合体(nexus)を形成する。そして、結合体が自己を存続させる、つまり自立的(self-sustaining)であるとは、その結合体が巨視的に見れば秩序的であること、換言すれば、個々の契機が具現する統合性を超えてそれらを一貫させる全体的秩序があることである。結合体は、個々の諸アクチュアル・エンティティの主体的諸形式を統合して一定の形式を維持するような上位的な秩序をもつ。そのような結合体は「社会(society)」と呼ばれる。「社会」とは、それを構成する諸アクチュアル・エンティティが、ある共通性を分有することで一貫した統一性を備えた結合体である。この共通性をホワイトヘッドは「社会」の限定特質(defining characteristics)と呼ぶ。それは、個々のアクチュアル・エンティティの主体的形式を限定する秩序であり、個を統合する全体の原理である。結合体は、それ自身を限定しその構成要素に分有される共通の形式をもっているという意味で、一つの全体的な秩序をもっている。また、より広い視座から見れば、この全体的な結合体は、さらに大きな「社会」を構成する要素ともなりうる。

こうして、現実世界は、下位の結合体から上位の結合体まで、多様な「社会」を含む「構造化された社会(structured society)」を構成する。それは、静的な構造体ではない。「構造化された『社会』の複合性が増大することは、自然の中に浸透している一般的な目的を例証している」のであり、そこに世界の創造的前進がある。複合的に構造化された社会は、常に新しい要素を産出し多様性を増しつつ、それを自らの構造的秩序の構成要素として受容する。この営みのうちに、「社会」とその環境との動的な関係性がある。ホワイトヘッドによれば、「すべての『社会』は環境としてのより広い『社会』を必要とする」。そこで問

題となるのは、構造化された社会が複合性を増していくという自然の趨勢であり、環境としての社会も個々の有機体もこの趨勢の中で、秩序の存続という傾向をもつとともにその変化にも曝されるということである。「社会」が環境の変化に応じて自己を存続させるために採る方法には、主に二通りある。まず、その構成要素の細々した多様性を除去し同質的で斉一的な客体化を促すことで結晶のように頑固な結束を固める方向で物的秩序の反復を強化することである。あるいは、心的極の指向を強くし「環境の新しい要素を、構造化された社会のメンバーに固有の複合的経験と調和させるような主体的形式をもって、明確なフィーリングへと受容すること」により、環境の新しさと調和する新しい自己を実現することである。この後者の仕方ですべて自己を存続させる「社会」が「生きている」と呼ばれる。

『生きている社会』は、何らかの『生きている諸契機』を含む社会であり、それらの諸契機の心的極が創造的独自性に満ちている社会が「全的に生きている(entirely living)」結合体と呼ばれる。全的に生きているとは、その結合体が、自己を自己完結的に保持し閉ざすことだけではない。いかなる結合体も、それを存続させる開かれた環境のうちでこそ生き生きと自己を保ちうる。有機体とは、所与の環境に順応しつつ創造的に自己を実現することで自己の生きる環境を作るものごとである。環境と有機体との相互的な関係性を通じての調和的な創造は、一つのアクチュアル・エンティティから、構造化された「社会」、そして自然全体にまで当てはまる。「社会」が一つの生ける有機体でありうるように、自然もまたそれ自体の多様性と統一性とを創造的に実現し展開していく「生ける自然」である。

いかなる有機体も「友と共にある環境」を必要としている。そもそも環境が自己に対して開かれていてこそ、自己は自己を実現しうる。そして、激しい環境変動と生存競争の中で自己創造的に存続する「全的に生きている」結合体は、その環境に対して自己を閉ざしつつ存続するのではなく、むしろ環境に対して自己を開いていく。言い換えると、成功する有機体は、その環境を作り変える。しかも、その環境を利己的に作り変えて他に対して敵対的な条件を作るのではなく、自己と他者とが共存しうるような調和的な環境を作る。有機体を生かすこの関係性の全体は、当の有機体にとって生きるための環境であるとともに、それ自体が当の有機体を含むあらゆる出来事によって内的に構成されることによって生かされている巨大な有機体であり、また、それ自体の創造性をもって生きている有機体、すなわち「生ける自然」である。宇宙はこうしてその細部から全体に至るまで、生ける有機体、自己を実現する有機体、他を生かす有機体、他とともに生きる有機体に満ちている。そこに、そのつどの調和を実現しつつも自己を超え出ていく創造性の躍動がある。

4. 自己自身・他者・全体との関係性における価値実現

こうした有機体の哲学の視座から見れば、有機体の自己実現は、当の個別的自己とそれ自身との関係性、他者との関係性、そして全体との関係性の3つの相においてなされる。有機体と環境との関係性をこれら3つの相に照らして考察することで、「成長のイデオロギー」と「持続可能性のイデオロギー」との二者択一に直面している現代社会に新たな視座を与えられる可能性がある。有機体の哲学は、この2つのイデオロギー対立に代わる別のコントラストをもって、生ける自然としての創造的で秩序ある宇宙を考察する。すなわち、創造性もつ新しさへの冒険と、秩序もつ調和と安定性である。このコントラストにおいて、有機体と環境との関係性を上記の3つの相から考えれば、個々の有機体を固有の特殊性をもった自己たらしめているのは、まず、自己にむけて特定の環境が与えられているという初期的な事実性である。それは、特定の他者を含み歴史的な経緯をもって与えられた環境であり、それが与えられるということは、その環境そのものがそれ自身を新たに生起しつつある有機体に向けて開いているということである。次に、そのように自己に向けて開かれた環境の中で、有機体は、まさにその個別的で唯一無比の自己へと生成していく。そこには、開かれた与件的な環境から個別的な自己自身へと自己完結的に閉じていく自己完成のプロセスがある。これがいわゆる合生のプロセスである。しかし、こうした個別的自己の自己完成ないしは自己実現という、開かれた環境から自己自身へと閉じていくプロセスは、所与の現実世界全体を自己のうちに引き受けてなされる価値実現という意味では、開かれた全体を具現する有限で閉じた個の生成である。しかも、その完結した自己は、脱自的にそれ自身を客体化し環境へと与え返す。こうして、生成し自己を完成させた個は、「生ける社会」や「生ける自然」を構成する新たな構成要素として、自己を環境へと開き、その環境を自己が存続するための特殊な環境へと作り変える。そこには、閉じた自己が環境へと自己贈与的、貢献的に開かれていくプロセスがある。これが、合生のプロセスに続く移行のプロセスであり、この両プロセスの律動的な展開の中で、有機体と環境の関係性は、現実世界を創造的に前進させるような躍動性をもつ。個別的自己の生成のプロセスは開かれた環境から完結した独自の自己へと閉じるばかりでなく、完結した自己は後続する環境世界に、「全的に生きている」結合体を含む生きた「社会」に、ひいては「生ける自然」全体に脱自的に自己を投げ出し、永続的な影響効果を与え続ける。そこでは、一切が、生かされつつ生きている。一切が相互に関係し合い、その関係性の中で創造的に自己を実現しつつ、他の自己実現のための環境を作る。このことが自覚されたとき、人間の自然環境

に対する責任という環境倫理の課題の宇宙論的・存在論的な意味が自覚されるだろう。

5. 「よりよく生きる」ための宇宙の文明化

こうした議論は、自己自身への生成の自由と、環境世界に対する責任という倫理的課題を照射する。ホワイトヘッドの文明論では、この自由と責任という問題が、冒険と調和という視座から捉え直されている。ホワイトヘッド文明論は、新しい冒険的な秩序がいかにして既存の秩序の存続が引き起こす価値低下を打開する新たな展望を開くかという問題と、この新しい冒険的な要素が破壊や対立ではなく、いかにして新たな調和的秩序を文明社会にもたすかという問題とをめぐって展開される。ここに、文明の倫理学の問いがある。

有機体の哲学に立脚した文明倫理学にとって、最大の問題は、「全的に生きている」結合体を含む「生ける社会」としての文明社会が、そして、それらを含む「生ける自然」が、常に調和的な創造性を具現しているわけではないということである。そこには、その秩序を存続させようとする有機体に対して絶えず変化する環境の流動性があり、また、自立しようとする有機体同士の葛藤と対立がある。一方には、安定した秩序を維持しようとして他に対して閉鎖的で自己に対しては反復的になっていくことで生き生きとした活力を喪失して頹落していく有機体があり、また、他方には、新しい要因を実現しようとする創造的に冒険する有機体が、既存の秩序を超え出て、これに対して破壊的な作用をする傾向もある。これらは、生命の根本問題であり、また、文明化された社会の根本問題である。

まず、われわれは、従来の社会的秩序や一般的な理解の枠組みに対する新しい展望の導入という、冒険的で、ときに破壊的な作用を起こす有機体の生の営みをもつ倫理的な意味について考えたい。そこには、旧来の秩序を保持する保守的な立場から見れば、破壊的な悪がある。しかし、それはまた、新しさを実現しようとする生命の躍動であり、新しさへの創造的前進という宇宙の衝動の具体的な活動でもある。そこには、新しい理想の探求という意味での善の実現の努力がある。よく生きることだけが、生命が理性を備えるに至った意味ではない。よりよく生きることを目指す冒険的な探求こそ、理性の真の機能である。そこに、所与の環境によって限定されつつも、その限定を超え出て新しさを追求し自己存立の核としてその理想を具現しようとする自由がある。このとき、善とは、永遠不滅のイデアではなく、すでに実現された「よく生きている」有機体のよさでもない。善とは、よりよく生きるための生命の技芸、よりよい価値を実現しようとする文明化の努力のうちに、常に途上の相対的な形式として提示され、受け容れてられていくものである。したがって、ときとしてそれは非常に破壊的なものとして、つまり悪として実現されるかもしれな

い。そのような危険性を含んでいることが、よりよく生きるという生き方を目指して既存の秩序を超えていく有機体の冒険である。このように定着した秩序のうちに不協和を奏する要素を導入しようとする冒険を受け止め、世界全体の新しさへの創造的前進の焦点として受容するという寛容さが、世界の善性である。

最後に、そのような冒険的な前進の試みと安定した秩序との対立をコントラストへと転換し和解させるような、有機体の哲学のヴィジョンを考察したい。それは、「友と共にあるという環境」の友愛、あるいは他によって生かされつつ生き、そして他を生かそうと自己を超え出る有機体の生成消滅の営みをもつ配慮と寛容、あるいはそうした流転する世界の直中で実現された調和的価値を失わせまいとする優しい配慮、といった言葉で暗示されてきたヴィジョンである。ホワイトヘッドは、共に生き、他を生かすような配慮を愛と呼び、一切を生かすような宇宙の衝動を神のエロスと呼び、そして、それらによって招来される不調和を超えて創造的な調和が実現されていくことを平安と呼ぶ。宇宙は物的には蕩尽され消耗していくが、そういった下向きの趨勢とともに、スピリチュアルに上昇していくという上向きの趨勢もある。ホワイトヘッドが示そうとした平安のヴィジョンとは、調和した秩序の存続という、無時間的な理想の境地ではない。それは、より広大な視座に立つてより広大な有機体のよりよき生を実現しようとする営みが実現する調和的な創造の営みが受け取り実現する「生ける自然」のよりよき生のヴィジョンであり、文明化されつつある宇宙がより高度に洗練された文明化を達成していくというヴィジョンである。

6. まとめ

近代の「成長のイデオロギー」に代わって提唱される「持続可能性のイデオロギー」に対して、本研究では、有機体の哲学が示した創造性と調和的秩序のコントラストの実現という観点こそ、今後の文明社会が正面から取り組むべき課題であることを提唱したい。その取り組みの基礎となる深い形而上学的宇宙論と文明論は、すでに、有機体の哲学によって示されている。その洞察は、端的に言って、環境とは、下位にある有機体を生かす上位の有機体であり、また、上位にある有機体を生かす下位の有機体でもありうるということ、そして有機体とは、それ自身のために生きるだけでなく、他を生かし、全体を生かすという仕方ではじめて「全的に生きている」と言えるのだという、単純だが深みのある洞察である。その洞察の基礎にあるのは、こうして生かされつつ生き、そして他を生かすという有機体の営みの調和的で時に冒険的な関係性を通じて働いている「創造性」こそが、生命と文明社会と自然とを含むこの宇宙の根本的な原理であるという洞察である。